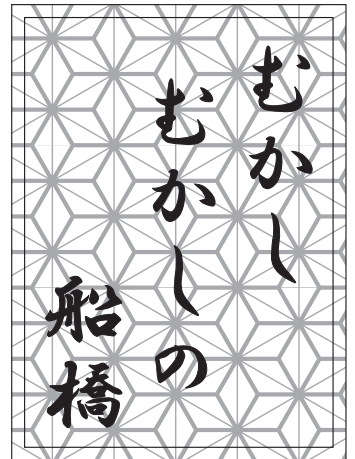




太古から人々が集まり、暮らし、愛してきた、ふるさと船橋
1万年を超える悠久の時間を旅した船橋人たちの足跡を振り返ります。



- 1 縄文中期の集落跡が全面発掘された高根木戸遺跡
- 2 古作貝塚の母子合葬と思われる人骨
- 3 古作貝塚から出土した貝輪と土器（レプリカ）
- 4 夏見大塚遺跡の方形周溝墓

原始

旧石器（先土器）～縄文～弥生時代

船橋に人が住み始めたのは旧石器時代と考えられています。西ノ台遺跡からは当時の石器が大量に出土しました。また、焼けた礫（石ころ）も発見され、火を使っていたことが確認されています。

縄文時代の遺跡は、市内の台地から数多く発見されています。縄文早期の飛ノ台貝塚は、日本で初めて炉穴が発見された遺跡として有名です。また、縄文中期・後期は東京湾沿岸の貝塚文化の最盛期で、市内にも中期の海老ヶ作貝塚や後期の古作貝塚など多くの貝塚があり、前貝塚町という地名も残されています。

稲作と鉄器が普及した弥生時代の遺跡としては、夏見大塚遺跡、夏見台遺跡、立場遺跡などがあります。人々は夏見などの台地上で小さなムラを営んでいたようですが、市内では水田跡はまだ見つかっていません。

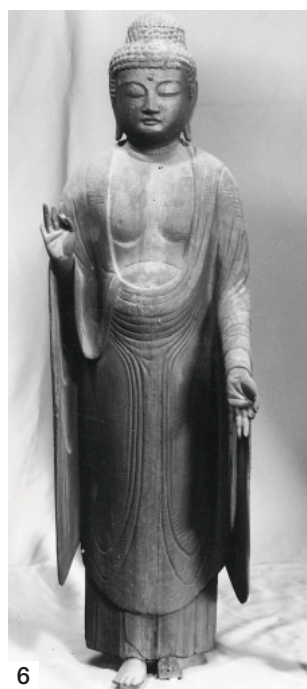
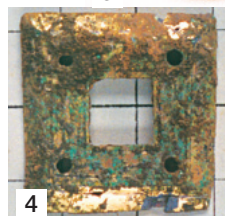
稲作によって、人々の間に貧富の差が生じると、埋葬の仕方にも違いが見られるようになります。土盛りを施し中央に家長を葬った方形周溝墓は、後の古墳の起源と考えられており、夏見大塚遺跡からも発見されています。

また、こうした関係はムラとムラの間にも見られ、強いムラが弱いムラを従えて次第に成長し、やがて小さなクニへと発展していきました。同じく夏見大塚遺跡から発掘された銅鐻（矢じり）も、そんな戦乱の時代の名残かも知れません。

古代

古墳・奈良・平安時代

- 1 女性をかたどったと思われる人物埴輪の頭部
- 2 印内台遺跡から発掘された1頭分の馬骨
- 3 夏見台遺跡から出土した和同開珎
- 4 印内台遺跡から出土した帯金具
- 5 現在の船橋大神宮
- 6 平安末期のものといわれる海神念仏堂の阿弥陀如来立像



市内には現在、明らかに古墳と呼べるものはなく、発見された埴輪などからその存在を推測するのみです。一方で、夏見台などの台地上を中心に、カマドを持った住居跡や、滑石を加工する工房跡などが多数発見されています。

奈良時代以降の律令制度のもとで現在の船橋市域は、下総国の葛飾郡と千葉郡にまたがっていました。『倭名類聚』に見られる「下総国葛飾郡栗原郷」は、旧葛飾村一帯を指し、印内台・本郷台遺跡もこの栗原郷の一部であったと思われる。小栗原（現在の本中山）という町名も、栗原郷に由来するものです。また両遺跡からは多数の馬骨が見つかっています。当時、馬は大変貴重なものでした。そして帯金具や円形硯、さらには和同開珎や富寿神宝といった貨幣が出土したことなどを考えあわせると、このあたりには郡や郷に関連した役所があったのかも知れません。

ところで、船橋っ子になじみの深い神社、船橋大神宮には「意富比神社」という別名があることをご存知でしょうか。『三代実録』には、この「下総国意富比神」についての記事が登場します。実は、これこそが船橋について書かれた最古の文書なのです。貞観5年に正五位下、13年には正五位上が、さらに16年には従四位下が授けられたとあり、当時重要な神社として位置づけられていたことが分かります。



2



1

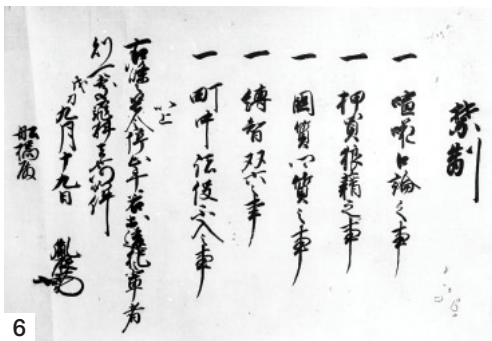
- 1 阿弥陀三尊の種字（梵字）が彫られた、延慶3年の板碑
- 2 鎌倉後期の造立と推定される五輪塔（右）と宝篋印塔
- 3 東中山台遺跡群出土のかわらけ（15～16世紀）
かわらけとは素焼きの土器で、使い捨ての食器のこと
- 4 夏見加賀守政芳が城主だったとされる夏見城址の土塁
- 5 夏見長福寺の聖観音と胎内銘
「夏見勘解由」という土豪らしき寄進者の名が見られる
- 6 高城胤辰が出した「禁制」



4



3



6



5

中世

鎌倉～南北朝～室町～戦国時代

文治2年の『吾妻鏡』に「院御領船橋御厨」という言葉が記されています。船橋御厨とは、伊勢神宮の荘園であった夏見御厨の別名ですが、これが「船橋」の地名が見られる最初の記事です。「院御領」という記述から、当時、船橋御厨が後白河法王に寄進されていたと考えられます。

鎌倉時代の市域についての文献は少なく、当時の造立と推定される板碑（供養塔婆）や石塔が残されているのみです。宮本西福寺の五輪塔と宝篋印塔は、県文化財に指定されている見事なものです。当時の船橋には立派な寺院があり、それを支える集落が存在したのでしょう。

南北朝時代、室町時代の文書には小室、大神保、車方、小栗原などの名が記されています。戦国時代には、高城氏の台頭とともに、船橋に関する資料が多くなります。高城胤辰が船橋大神宮にあてた文書が書き写されて伝わっているためです。また、戦国時代末期には、市内の各地に小規模ながら城館も建てられました。これらは近世の幕開けとともに廃され、山林に埋もれてしまったようです。

海老川周辺では、いつのころから市が開かれるようになり、五日市・九日市の村名として残りました。戦国末期の船橋は、大神宮周辺を中心に近隣で最も開けた場所として賑わいを見せていたことがしのべられます。

近世

江戸時代



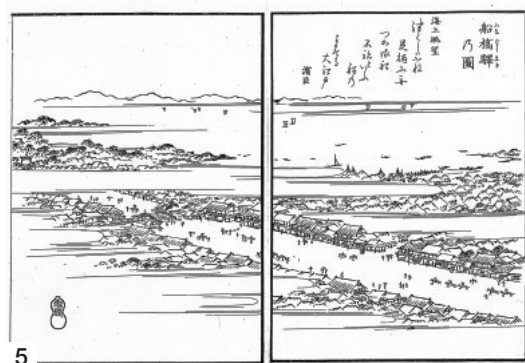
2



1



3



5



4

- 1 江戸初期に栗原地区を治めたとされる成瀬正成後に尾張徳川家の家老として犬山城主になる
- 2 旧大穴と楠ヶ山境の野鳥堀（牧場周囲に設けられた堀）市域の中央台地は幕府の「小金五牧」のひとつだった
- 3 鈴身町の庚申塔群
- 4 現在まで続く大仏追善供養。大仏につけられたご飯を食べると、一年間無病息災で過ごせるという
- 5『成田名所図会』より幕末の船橋宿の様子

北条氏滅亡後、関東へ移封された徳川家康は民心の掌握に意を注ぎました。御成街道（東金街道）と佐倉街道（成田街道）の整備などもその一環です。家康は2度、東金に遊獵に赴き、2度目の帰途の元和元年、船橋御殿に泊まっています。

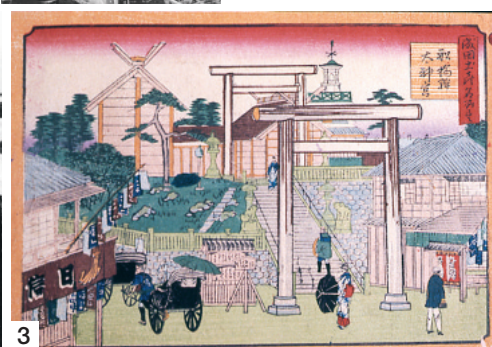
現在も盛んな船橋の漁業の起源は古く、家康が訪れたときには既に営まれていました。その際、家康に魚を献上したことをきっかけに、船橋浦は「御菜浦」となったと伝えられています。船橋の漁師たちは、将軍家に魚介献上の御用を務める代わりに、広大な漁場の独占を許されたのです。

しかし、元禄の大地震のために船橋沖の海底に異変が起き、不漁が続き、やむをえず魚介献上を金納に変更しました。御用を果たせなくなったことで御菜浦としての威信を失ったのか、それ以降、船橋浦は密猟者に荒らされることが多くなりました。漁場紛争はさまざまな悲劇を招き、文政7年には、船橋漁師総代が入牢させられ獄死するという事件も起こりました。現在でも本町不動院で行われる「大仏追善供養」は、その供養に起源をもつといわれています。

五日市村、九日市村、海神村の総称としての船橋宿は、房総屈指の宿場町として発達しました。江戸後期には29軒の旅籠と、九日市だけでも60軒の商家があり、初めて江戸へ行く者が船橋に着いて「はや、江戸に着きけるよ」と勘違いしたという逸話もあるほどです。



- 1 旭町共同墓地にある脱走方（旧幕府軍）戦死者の墓
- 2 海神念仏堂にある官軍方戦死者の墓
- 3 『成田土産名所尽』より明治20年代の大神宮周辺
- 4 大神宮の階段から眺める本町通り（大正中期ころ）
- 5 大正時代の三田浜塩田（現在の市役所のあたり）



近代

明治〜昭和初期

慶応4年は9月に明治に改元されますが、改元前の閏4月3日、船橋地方は未曾有の大事件に巻き込まれます。戊辰戦争の局地戦が船橋周辺で起こり、中心街の大半が戦火で焼失してしまったのです。房総史における近世から近代への転機となった市川・船橋戦争から140年近く経た現在、戦争の遺跡はわずかに残る戦死者の墓のみで、海神念仏堂、宮本了源寺・慈雲寺など7か所に見られるだけです。

明治の地方制度の下で現在の船橋市域は、明治2年に葛飾県、4年に印旛県、6年に千葉県と管轄が変わりました。やがて明治22年に市制町村制が実施されると、東葛飾郡船橋町・葛飾村・法典村・塚田村・八栄村、千葉郡二宮村・豊富村となりました。

当時の市域は農業を主とする集落が依然多く、その中で鉄道沿線では野菜類の栽培が盛んになっていきました。明治30年代からは海苔の養殖が始まり、明治以降は船橋浜でも塩業が営まれ、明治後期から大正前期にはかなりの生産量をあげていました。

関東大震災後の東京の復興は目覚ましく、人口拡大は千葉県にも及ぶようになりました。船橋町では市制施行が急務との声が高まり、昭和12年4月1日、葛飾町、法典村、塚田村、八栄村との合併により船橋市が誕生しました。